



ばば よしひろ  
馬場 吉弘  
(大学理工学部教授)

## 雷電磁界パルス・ 環境電磁工学

### 雷

雷放電は、30億年以上も前から地球上で発生しており、生命の誕生に繋がる有機分子の生成に寄与したと考えられています。人類が誕生し、文明が発生した頃には、雷(神鳴り)は神の怒りとして受け止められ、18世紀の中頃まで、そのように信じられていました。ギリシャ神話のゼウス、エジプト神話のタイフォン、北欧神話のトールの武器は雷であったことなどからも、当時の人々の受け止め方を窺い知ることが出来ます。中世には、教会で、鳴鐘者が雷で亡くなったとか雷による火事で甚大な被害を受けたという記録が残っています。周囲に対して高ければ高いほど被雷の確率は高まるため、当時の教会の鐘塔は、その街でも雷を受けやすい場所であったこととなります。稲妻(雷放電路)の温度は約3万度もありますので、現在でも雷が原因となり火事が発生することがあります。

### 神話から科学へ

雷が電気現象であることを科学的に証明したのは米国のフランクリンで、1752年のことです。手元の数センチメートル部分のみが非導電性で、それ以外の

部分は導電性の糸に結びつけた瓶を雷雲(積乱雲)に向けてあげ、手元の部分で小さな火花放電が発生することを確認し、雷雲が電気(電荷)を帯びていることを示しました。雷雲内の電荷は、雷雲と大地の間に電界をつくり、その電界中に導電性の糸が張られると、静電誘導という現象により、糸の両端に逆極性の電荷が発生します。フランクリンは、雷雲内の電荷を直接確認したのではなく、静電誘導により発生する二次的な電荷を通して、雷雲内の電荷の存在を確認したことになります。フランクリンは、この成果に基づき、自宅の煙突の先端に金属棒を取り付け、その下端を電線を介して、大地に埋めた金属棒(接地電極)に接続し、避雷針システムを構築しました。最頂部の避雷針で雷を受け、電線を介して、雷電流を大地に流し込めるため、避雷針より下側の空間に存在する建物や人や機器を高い確率で雷から護ることが出来ます。

この避雷針システムは瞬く間に世界中に普及しました。これを凌ぐ雷防護システムは今も存在していません。

### 雷の発生メカニズム

夏の強い日差しにより地面付近の湿った空気が暖められると、強い上昇気流が

発生します。大気圏内では、高度とともに気温が下がるため、上昇する湿った空気の一部は水滴化します。さらに上昇すると、水滴は氷晶化します。上昇気流の中で、氷晶同士が衝突結合し巨大化したものが雹です。雹は重いので、それに作用する重力が上昇気流に勝り、落下し始めます。雹は僅かに分極しており、例えば、気温がマイナス15度より低いところでは、雹の内側にマイナスが、表面にはプラスが現れます。雹に衝突した氷晶は、雹表面のプラスの電荷を奪い、上昇を続けます。これにより、雷雲内の上部にプラスの電荷群が形成されます。プラスの電荷を奪われた雹は、雷雲内の中部から下部にマイナスの電荷群を形成します。このように雷雲内で電荷が分離されると、それらを中和するため、雷雲内で放電が活発に生じます。その一部が、雲底から飛び出し、大地に向かって階段状に進展します。このときに流れている電流は100アンペア程度です。この階段状放電が大地に近づくと、構造物などの先端(避雷針など)の電界が高まり、そこからお迎えの上向き放電が放たれます。それが下向きの階段状放電の下端と繋がると、大地から上向きに数万アンペアの大電流が光速の半分程度の速度で上向きに進行

していきます。このとき、放電路の温度は約3万度にも上昇し、爆音と閃光とともに、強力な電磁波が放たれます。この電磁波は、雷電磁界パルスと呼ばれています。

### 雷電磁界パルス

雷電磁界パルスを積極的に利用するものとして、雷放電位置標定システムがあります。これは、雷電磁界パルスを多点で受信し、各受信機へのパルスの到来時間差および到来方位から、雷放電位置を推定するシステムです。襲雷警報として利用されている他、各地域の雷頻度データは電気・通信設備の耐雷対策や雷リスク評価に活用されています。雷電磁界パルスが積極的に利用されているのは、恐らくこのシステムのみで、多くの場合他の電気・通信設備や電子機器にとつては有害な電磁界になります。雷電磁界パルスによる誘導電圧が、誤作動や故障を引き起こす可能性があるからです。

### 環境電磁工学

このような困りものの電磁界を対象とし、その解析法や防護策を扱う学問は、環境電磁工学と呼ばれています。8年ほど前に、本学の電気系学科に、この科目

が新設されました。教科書もまだ用意できていない科目ですが、この講義内容に興味を持った学生の何人かが、4年生になると私の研究室に入ってくれます。彼らの能力や努力は素晴らしく、大学院生にもなると、企業からの受託研究課題や私たち自身のアカデミックな研究課題を見事に解決し、成果を英語の論文にまとめあげます。私自身も必死で指導と支援を行っていきます。過去5年間に、私たちの研究成果は約30篇の論文として、米国電気電子学会(IEEE)等の雑誌に掲載されていますが、私が第一著者のものは4篇のみで、残りの多くは大学院生自身が主体的に行った研究の論文です。光通信や半導体工学の分野で数多くの世界的発明を成し遂げた西澤潤一先生の著書の中に、「優れた発明発見はすべて20歳代に生まれている。」という一文があります。共感するこの一文を心に留めて、これからも研究と教育活動を続けていきたいと思っています。

## 政策学部におけるアクティブラーニングの実践



かざま のりお  
風間 規男  
(大学政策学部教授)

### 1. アクティブラーニングの展開

政策学部では、「問題を発見し解決する能力（政策能力）」を備えた人材の教育を目指しています。政策能力は、教室の中で受動的に講義を受けるだけでは身に付きません。キャンパスの外に出て現場に立ち、様々な人から話を聴き、グループの中で議論を重ね、具体的な解決策を思考するなど、主体的な姿勢が求められます。そのような学びのスタイルを、「アクティブラーニング」といいます。

アクティブラーニングにおいては、教員は、学生たちが自ら主体的に動き、自分の頭で考えて答えを出していくための「環境」を用意し、学習の過程をサポートする役割を担います。大学教育においてアクティブラーニングを展開する際に直面する最大の問題点は、ほとんどの教員が学生時代にそのような教育を経験していないということです。学部開設以来、教員たちは、他の教員と情報を共有して、アクティブラーニングのあり方を模索してきました。ここでは、私の担当するゼミで、どのようなプログラムを展開しているかを紹介することで、政策学部におけるアクティブラーニングの一端を紹介

しようと思います。

### 2. ゼミで実践する5つのプロジェクト

私のゼミでは、「政策立案工房」と銘打って、国や自治体に取り上げてもらえるようなクオリティの高い政策を提案する活動を展開しています。ゼミには、1学年30人近くの学生が所属しています。1つの課題を全員で取り組むのではなく、5つのバラエティ豊かなプロジェクトを用意し、学生たちには自分の関心に合ったものを1つ選んでもらうことにしています。

1つ目のプロジェクトは、日本最大の学生による政策立案大会であるISFJ日本政策学生会議に参加するものです。現状分析および政策の提案について論文を書き、12月の初めには、全国の大学から優秀な学生たちが集まる中でプレゼンテーションを行います。高度な数理分析を駆使するゼミが多い中で、私のゼミは、フィールドワークを拠り所として、政策の独創性と実現性で勝負しています。過去には、最優秀賞を受賞するなど、優れた成績を収めています。

2つ目のプロジェクトは、京都府の職

員と協働して行う政策提案活動です。毎年、京都府の職員の方にゼミに参加してもらい、一緒に府が直面する問題を考え、新しい事業の提案を行っています。学生だけで政策を考えると知識が不足して、独善的になる傾向にあります。職員の方は、豊富な知識を持っていますが、長い職務経験の中で柔軟な発想が失われています。学生の柔軟な頭と職員の知識が一種の化学反応を起こして、魅力的で実現性の高い政策を提案することを期待しています。

3つ目のプロジェクトは、国際活動を展開するものです。海外のフィールドワークは、教員がアレンジするものが多いと思いますが、このプロジェクトでは、学生たちがゼロから国際貢献活動を企画して実践することを求めています。例えば、2016年度は、フィリピンのイロイロ市において、子どもたちを対象に、平和教育を実践しました。現地で活動するNGO団体とコラボして、フィリピンの小学校と日本の小学校をスカイプでつなぎ、交流を深めながら平和について考えるという企画でした。事前に日本の小学校に足を運んで打ち合わせを行い、フィリピンの事情については現地

のNGOと打ち合わせを行い、フィリピンの事情については現地のNGO

のNGOと打ち合わせを行い、フィリピンの事情については現地のNGO

団体と連絡をとりあうことで、効果的な平和教育プログラムを開発してきました。

4つ目のプロジェクトは、地域活動を展開するものです。このプロジェクトは、地域活動家の方と一緒に地域の中に入り、地元の人たちと協力しながら、地域の課題を解決することを目指しています。2016年度は、亀岡市河原林町において子育てママたちの交流プロジェクトを企画・実践しました。空き家を見つけ、何度も足を運び修繕・掃除をして、地域活動の拠点として活用可能な状態にしました。そのうえで、交流のためのワークショップを企画して、子育てママたち自らが地域の課題について考える「きつかけ」を作りました。

5つ目のプロジェクトは、特定の課題について徹底的に調査するリサーチ中心のプログラムです。2016年度は、地域政党をテーマに設定し、アンケート調査やインタビュー調査により、地域政党の抱える問題点を徹底的に調べました。その調査結果は、地域政党を担う人たちに報告し、地域政党のあり方について活発な意見交換を行いました。地域政党は、クリエイティブな存在であるべきで、そのためには政策形成能力を高め、多様な

### 3. 学生たちの成長

学生が最も苦労するのは、テーマ設定の段階です。政策立案や活動のテーマを自分たちで定めなければなりません。多くのグループでは、何に取り組んでいいのかかわからず、一度は「迷走」します。教員は、学生たちと会話を重ねることで、彼らの問題意識を引き出し、テーマの設定をサポートします。アクティブラーニングでは、教員は答えを提示しません。そうしてしまうと、学生たちは、教員の答えを期待して、主体的に思考することをやめてしまうからです。

どのプロジェクトに参加しても、ゼミの時間だけでは課題は終わりません。学生たちは、膨大な時間とエネルギーをプロジェクトに注がなければなりません。しかし、苦労が多ければそれだけ達成感も大きくなります。活動を通じて、学生たちは様々な経験をjして、学びを得ていきます。そういつたものすべてが卒業後に社会人として生きていくうえでの財産になるのです。



じゅん 潤  
す 須藤

(大学グローバル・コミュニケーション学部助教)

## 日本社会での活躍を目指す留学生のために

### 私が接する留学生

グローバル・コミュニケーション(下GC)学部は、学生全員が留学を経験する学部です。この「留学」には、「海外への留学」と「日本への留学」があります。私は日本への留学、つまり、日本語を専攻する外国人留学生の指導を主にしています。

GC学部では現代日本語を専門とする留学生約60人が学んでいます。彼らは、同志社大学入学までに日本語を留学レベル(おおむね一般教養の授業が受講できるレベル)まで勉強してきた学生です。ですから、大講義室で他学部の学生と肩を並べて、普通に日本語で講義科目を履修するのはもちろん、学部の日本語や日本文化・日本社会についての講義や実習ゼミも日本語で受講し、最終的には日本語でゼミ論文も執筆します。4年間で、日本語でのコミュニケーションの奥深さを理解し、実感してもらい、卒業後、日本企業をはじめとした日本社会で活躍し、コミュニケーションの面で自ら成長していける人材の育成を目指しています。

このように、私が接する留学生は、入学までに高い日本語力を身に付けた学生

です。そこからさらに日本語を深めようとしている学生の要望にどのように応えていくかが、GC学部開設当時(2011年)からの私の課題です。

### 留学生と日本語の発音

私の専門は「音声コミュニケーション」、平たく言えば、日本語の話しことです。その中には、アクセントやイントネーションといった発音に関することも含まれますし、あいづちや話題といった会話に関することも含まれます。入学試験のために勉強する必要がないからか、話しことば、とりわけ発音については、留学生の間でも能力差が顕著です。実際、大学に入学するまで、発音を本格的に勉強したことがない人が大多数です。

1年次の科目では、日本語の発音に関する授業を行っています。例えば、日本語のアクセントは、「雨」「飴」のように意味を区別したり、「もうしました」「二語の「もう—しました」と一語の「申しました」のように、単語間の境界を示したりするなど、日本語の中では重要な役割を果たしています。しかし、それを覚えて、正確に発音できるようにするためには、規則を覚える必要がありますし、

規則通りに発音をコントロールできるようにする必要があります。

### 「反転授業」の発音を学ぶ

この科目では、授業時間に規則や背景知識等についての講義は基本的に行いません。事前に講義ビデオを視聴し、講義ノートを作成することになっています。

そして、作成した講義ノートをもとに、授業時間では、3〜4人のグループでノートの内容を確認しながら話し合い、その後、確認小テストを行います。このように、事前にビデオで予習しグループで確認することには少なくとも二つの利点があります。一つは、ビデオは何度でも止めたり、戻ったりすることができる点です。留学生にとって、日本語での講義は時に難解なこともあるので、これは非常に大きな利点です。もう一つは、学生同士が互いの学びをチェックし、そして、それを教員がチェックできる、という点です。学び合いのコミュニケーションに参画できることは、将来社会人として生きていくためにも必要なスキルだと思えますし、互いに意識すると自ずと自分に対する責任感も高まります。さらに、講義をする教員にとつて、講義内容を学生がど

のように理解したかというプロセスはとも気になるのではないのでしょうか。それが、グループ内での話し合いに現れます。話し合いに耳を傾けながら、誤解や不足があれば、すぐに補足の説明ができるというところも良い点です。

そして、授業時間の残り1時間強で発音に関する実習を行います。アクセントであれば、単語のアクセントをインターネットで調べる、調べた情報から発音の仕方をメモする、メモした通りに発音する、発音した音声を録音する、録音した音声をクラスメートに評価してもらう、といった実習です。あるいは、ある単語のアクセントを調べた上で、教員や学生が発音する単語のアクセントが正しいかどうかを一人一人が判断するという実習もできます。講義を予習とすることで、発音の実習に長く時間を割けるというわけです。これがいわゆる「反転授業」ですが、実習の質が向上するにつれて、留学生の満足度も高くなってきていると感じています。

### 日本語の多様性と日本社会

ところで、発音の微妙な違いは、意味や印象の伝達という点で、大きな誤解を

もたらすことは多々あります。例えば、最近は店頭で外国人の店員と話すことも多くなりましたが、発音が違うせいで、会話がうまくかみ合わないこともあるでしょう。たとえ実際の仕事ぶりが優れていたとしても、発音のせいで資質や能力信用等を疑われることもあり得ます。面接では合否に影響を及ぼすことも想像に難くありません。正確な発音の習得が、日本社会での活躍を目指す彼らにとつて有利となります。

その一方で、「日本人のような発音になりたくない」という学生のコメントを見る度、私はやや戸惑いを覚えます。学生がより正確な発音を身につけたいと思うことに対する喜びはもちろん感じるのですが、日本社会が「日本人のような日本語」しか受け入れない、つまり、日本語の多様性にまだあまり寛容でないことに対する申し訳なきさを感じてしまいます。多様な日本語が日本社会で受け入れられるように、研究や活動を続けていきたいと思えます。

## 英語力のつく授業を目指して

いな がき しゅん じ  
稲垣 俊史

(大学グローバル地域文化学部准教授)



「どうすれば英語ができるようになるのか」を考え始めて30年になります。最近、この問いに答えることが私のライフワークではないかとさえ感じています。まず、そのような考えにいたった背景を「英語学習者としての経験」、「第二言語習得研究者・英語教師としての経験」の順に述べます。そして、それらの経験を踏まえて現在実践している「英語力のつく授業」を紹介いたします。

### 英語学習者として

私は中学1年生から英語を習い始めましたが、英語は得意で、NHKのラジオ英会話もよく聴きましたし、高校時代にはビートルズを好きになり、英語がますます好きになりました。その後、大阪外国語大学（現・大阪大学外国語学部）に入学し、英語をマスターしようと、ES S (English Speaking Society) にも入りました。文法には自信があったので、あとは喋る練習をすれば話せるようになるだろうと思っていました。しかし、現実とは違っていました。どの部員もある程度話せるようになりますが、その英語には不自然なところが多く、私の英語も同様でした。ところが、部員の中には高校時代に英語圏に留学経験のある人がいて、

その人たちの英語は、流暢さ、自然さにおいて明らかに違っていました。「文法知識もあつて話す機会もあるのになぜあの人たちのようにならないんだろう」と真剣に考えるようになりました。

### 第二言語習得研究者・英語教師として

その後、「人はどのようにして第二言語を習得するか」を研究する学問分野「第二言語習得論」が存在することを知り、広島大学、ハワイ大学、マギル大学において、主に、日本人による英語習得、第二言語としての日本語習得を研究しました。そして、1999年より日本の大学で英語を教え始めました。

英語教師は、「どうすれば英語ができるようになるのか」に関する何らかの理論を持たないといけません。そうでなければ具体的に授業で何をしたらよいのか分からず、その場しのぎの授業になってしまうからです。私は、第二言語習得研究の知見と自分の英語学習・教授経験から、次のような理論を持って授業を行っています。

インプット ↓ インテイク ↓ 言語体系  
↑  
アウトプット

まず言語習得には大量のインプットが必要で、そして、インプットの一部は頭の中に取り入れられ、インテイクになります。さらに、インテイクの一部は学習者の第二言語系の構築に使われます。そして、構築された言語体系からアウトプットが産出されます。アウトプットはさらにインプットにつながり、言語習得をさらに促進します。

この理論から見ると、第二言語教育の役割は、第二言語習得プロセスが効率よく進む手助けをすることであると言えます。すると、英語授業で行うべきことは、まずインプット・インテイク活動を十分に引き、その上でアウトプット活動を導入することでしょう。日本のような教室以外で英語に触れる機会が少ない環境で英語を習得する場合、インプットの不足は深刻な問題で、これを克服するためのインプット活動が必須になります。また、習得効率を上げるにはインプットからインテイクへのプロセスを促進するインテイク活動も重要であり、インプット・インテイクが確保されれば、アウトプット活動がさらに習得を促進することが期待できます。

### 英語力のつく授業の実践

このような考えに基づき、私は過去18年間にわたり英語教育を実践してきました。具体的には、インプット活動としての多読、聴解、読解、インテイク活動としての音読、シャドーイング（音声聴きながらの音読）、アウトプット活動としてのストーリー・リテリング（本文内容を自分の英語で語り直すこと）、ブックレポートなどを行ってきました。典型的な授業の流れは次の通りです。(1) 250語程度のストーリーをスク립トなしで聴き、内容に関する問題に答える。(2) スクリプトを読み、答えを確認する。(3) 音読練習やシャドーイングを行う。(4) キーワードを見ながらストーリー・リテリングを行う。このように、授業では、第二言語習得プロセスを促進するようなInput-Take-Outputの流れに沿った活動を行っています。

ただし、インプット不足の解消には、教室外でもたくさんさんの英語に触れる必要があります。そこで、グレイディッド・リーダー（語彙、構造の難易度によってレベル分けされた読み物）を利用した多読を導入しています。主に授業外で、自分のレベルや好みに合ったやさしい読み

物をたくさん読む活動です。これにより、日本においても、苦痛なく、楽しみながら大量の英語に触れることができます。実際、学生の反応もよく、通年で40冊（40万語）読み、TOEICスコアが600点から800点に上昇した学生もいます。さらに、読んだ本のブックレポートを英語で行わせることで、インプット、インテイクに基づいた教室活動に結びつけていきます。

まとめると、英語力のつく授業とは、学生がInput-Take-Outputの流れにそつた活動に従事する授業だと言えます。今後も、有効な英語学習法・教育法を考察・実践していき、「英語力のつく授業」をさらに進化させたいと思っています。国際語である英語のブラッシュアップは、同志社大生にとってもニーズの高いものであり、精一杯手助けして、英語を使ってグローバル社会で活躍できる人材を1人でも多く輩出できればと思います。

# うつ病をもつ方の家族を支える



木村 洋子  
（女子大学看護学部准教授）

## うつ病患者の急増

うつ病は「抑うつ気分」「興味または喜びの喪失」「食欲低下」「眠れない」「疲れやすい」などを症状とする疾患です。「憂鬱である」や「気分が重い」、「気分が沈む」などの経験は、誰もが一度くらいあると思いますが、うつ病の場合はそのような気分が絶え間なく続き、たとえ休日を挟んでも継続して経験することになります。

プロ野球の観戦が何より大好きなお父さんが、ある日を境にパタッと観戦に出かけることをやめ、野球の話もしなくなり、スポーツ欄にも目を通さなくなつた。たとえ、テレビで野球中継が流れていても、いつものように喜んで見るどころか、テレビにも視線を向けられないなど、うつ病によつて日常生活は大きく変化してしまします。うつ病はお父さんだけの变化にとどまらず、明るく賑やかだった日々の暮らしはいつしかお父さんが耐えている重苦しい抑うつ気分のように、明るく笑い声もなく、何処と無くピリピリとした緊張感に包まれていきます。厚生労働省の患者調査によれば、うつ

病を含む気分障害と診断された方は1996年には43・3万人、1999年には44・1万人とほぼ横ばいで推移していたものが、2002年には71・1万人、2005年には92・4万人とおよそ2倍となり、2008年には104・1万人と報告されています。今も100万人の方が治療を受けながらうつ病と闘っており、その方々を医療・福祉・保健などの専門職者だけではなく、一番身近な家族も支えていることになりました。

## うつ病をもつ方の家族

古くは、1987年にOginoが「うつ病患者との相互作用により、家族が有害な影響を受け、うつ病を発症させるリスクが高い」と報告しています。およそ30年前から、うつ病をもつ方の家族を支える必要性について述べられていたことになりました。医療機関からの協力により、2008年実施したうつ病をもつ方の家族を対象としたインタビュー調査で、うつ病をもつ方の家族は【対応の仕方がわからない】【うつ病の症状（抑うつ感や不眠、食欲不振など）】【家族への依存】【医師からの服薬の指示を守らない】といったこと

を日常生活上の経験する困難な出来事として挙げていました。

## うつ病をもつ方の家族を対象としたプログラム

2007年から2013年まで、医療機関からの協力を得て、うつ病をもつ方の家族を対象としたプログラムを実施してきました。このプログラムは【疾患や治療についての情報提供】【医療職者と家族の交流】【うつ病をもつ方とご家族の関わり方の見直し】に焦点をあてたもので、2週間に1回お越しいただき、計6回実施します。期間はおよそ3カ月です。

プログラムに参加した家族は【疾患や治療についての情報提供】により、日常疑問や不安に思っていたことが解消し、【医療職者と家族の交流】により相談できる場所を得て、回を重ねるごとに、本来持つておられた力を徐々に取り戻されていくように感じました。

本来の自分に戻られた家族は【うつ病をもつ方とご家族の関わり方の見直し】により関わり方の修正や新しく関わり方を獲得するなど、さらに一歩前に進まれていくようでした。

参加した家族の言葉を借りれば、「ひとりで、もがいているような」や「すべてが絡まってしまったようで…」というプログラム当初の表現から、「ひとりじゃないんだ」や「絡まった糸を解くように…」という表現で、体験した変化を語られていました。

## 休職しているうつ病の方とその家族を対象としたプログラム

現在、近畿・関東地方の医療機関の協力を得て、休職しているうつ病の方とその家族を対象としたプログラムを実施しています。このプログラムは前述した「うつ病をもつ方の家族を対象としたプログラム」をベースに、家族はゲートキーパー機能（うつ病の状態・変化に気づく、見守り、アドバイス）を強化し、支える力を養うことと、休職しているうつ病の方は家族に支えられて、生活リズム・日常生活行動の改善・拡大をはかり、復職に対する準備性を高めるという複合的な目的を併せ持つことが特徴です。プログラムの実施は2週間から4週間に1回、協力いただいている施設に伺い、計6回実施します。期間はおよそ3カ月から6

カ月です。

支える家族にとっては、うつ病をもつ方の生活リズムのちよつとした改善や、日常生活行動のわずかな拡大が大きな変化であり、家族自身をプラス（良い）の方向に向かわせる原動力となると考えています。この原動力がうつ病をもつ方の支える力を更に高めることに繋がりが、身近な家族に支えられて、うつ病をもつ方はさらに改善・拡大をし続け、やがては復職に至るものと考えています。

うつ病をもつ方とその家族のそれぞれの歯車が上手く噛み合い、回り出したら私の役割は「うつ病をもつ方の家族を支える」から「うつ病をもつ方と家族を見守る」へと代わり、関係性を終了するのではなく、Open Endという形で継続し続けるのではないかと考えます。

## おわりに

振り返れば、10年近くも、そして、たくさんの方のうつ病をもつ方とご家族との貴重な縁をいただいて、プログラムを実施してまいりました。これからも継続して「うつ病をもつ方の家族を支える」ことに務めていきたいと思っています。

## Exhibition in IB Primary Years Programme



Mark Krabousanos  
(国際学院教諭)

### What is the purpose?

The Exhibition is an opportunity for year 5 students to showcase their abilities to inquire, share and help others. It is a collaborative inquiry process that starts from personal interest and passions, but extends into real world issues. It is an inquiry that requires students to identify, investigate and offer solutions to real-life issues or problems. It is an opportunity for students to demonstrate independence and responsibility for their own learning.

### What are the essential features?

The exhibition is an opportunity for students to model the IB learner profile and attitudes they have been developing in the PYP. Student show their ability to look at issues conceptually by asking key questions during their inquiry. It

is an opportunity for students to draw on their previous experiences with the six transdisciplinary themes and utilize these experiences during their inquiry. The exhibition requires students to utilize skills from all five transdisciplinary skill areas i.e., thinking, research, self-management, communication and social. It is an opportunity for students to explore significant and relevant knowledge to share with the community. It is an opportunity for students to demonstrate how they can take meaningful action as a result of their learning. The exhibition is ultimately an opportunity for students to be involved in all aspects of planning and assessing their own learning.

### Who plays a role?

There are several important roles that must exist for the exhibition to be a success. Without the full support of each group the success of the

exhibition diminishes greatly.

- Year 5 students
- Teachers
- Mentors
- Parent/Guardian
- Curriculum Coordinator
- Principal

### Assessments

We assess the process more than the product. The students should keep a journal throughout the exhibition that shows how their thinking and goals have developed. This journal may include pictures, diagrams, poems, timelines and writing. The mentors keep a journal that monitors student progress against a timeline. Both teachers and students will assess student work throughout the process of learning and at the end. The students will also create rubrics in order to reflect on their own performance and achievement throughout various aspects of the exhibition. Some areas where rubrics will be utilized:

- Journals
- PYP skills
- Final product
- Exhibition process

### Homework

Most regular homework routines will pause from the start of Term 3 until the end of the

exhibition. Some homework in math may be given each week. The students should use their time at home to research and prepare for the work in class. The actual work should be done in class so the teacher can keep track of progress.

### Other learning?

Since the exhibition is the culminating project of the PYP, most of the school day will be spent in preparation for the event. From the start of Term 3 until the exhibition itself, new learning will slow down. This means few new concepts, skills or strategies will be introduced. Students will be focused on consolidating and applying their learning. Students will also change to a new schedule that revolves around the exhibition. Students will return to their normal classroom schedule once the exhibition is complete.



IB Primary Years Programme Model